

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	気に関する複合語の習熟からみた小学生の気の働きについて
Author(s)	小泉, 節子
Citation	児童の言語生態研究 , 7 : 8 - 17
Issue Date	1975-05-24
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045077
Right	
Relation	



I 気に関する複合語の習熟から みた小学生の気の働きについて

(付) 教科書における気用語
の採択とその問題点

小泉節子

目的

国語教育を行うに当って、子どもたち自身の気の発達と無関係であろう筈もなく、気の発達に何らかの形で参加している面がなければならぬ。ところが、今までの国語教育に、そういう事と不可欠あるいは、そのこととの関係を論じられたものを見聞しない。我々が少くとも、国語科で、言葉を扱う以上、その発動としての気の発達をおさえ、それとの関係で言葉を指導すべきものでは、なかったらうか。子ども達は、いかに気が働くか。そしてそれをどれ程ことばにすることが出来るか、ということは、どの程度意識化して使うことができているかを、この調査の目的としたのである。そして、今後の国語教育は、このデーターをもとにして、言語以前の気の発達の助長や気の刺激を行うことが出来ればと思う。

方法

我々はどこかひとつの所を取り上げて、それを掘り下げていく、という部分的な追求でなくて、まず必要なのは、人間と気とのかわり合いという、全体像が、まず得られなければならぬ。その方法として、気とかわり合いのある言葉を、子どもたちに出させ、それを分類、体系化した。

ここに子どもたちの意識の集中するところ、意識の集まり方を見出ししてみたい。

調査事例の概説

○調査の提示と方法

口頭によって、担任から次の通り指示した。「言うことばに、かえすということばをつけると、『言いかえす』ということばができますね。(これで言うの複合語を出させたい) 気ということばの下にも、なにかことばをつけて、ことばを作ってください。知っているだけ書いて下さい。」

○調査対象

二年	東京・四谷第一小	20名
	東京・町田南四小	41名
三年	東京・町田藤の台小	35名
	横浜・大正小	43名
	東京・町田第四小	36名
四年	東京・港南小	42名
	東京・玉川学園小	74名
五年	横浜・大正小	43名
	東京・玉川小	37名
六年	横浜・大生小	39名
	横浜・芹ヶ谷小	40名
	東京・玉川小	31名

(一年生は問題の意味が理解できないので省いた。)

○実施年月日 昭和四十九年四月～七月

まず集録した全ての語を、我々の分類ののりによって、あげた表が、表1である。

(分類方法)

分類語彙表(国立国語研究所編)を参考に、体・用・相の三種類にわけてみた。但し分類語彙表に記載されている気に関する語は、全部で五十一語という少なさで、しかも私たちが今回調査した語の中で、最も割合の少ない名詞化された形が、全てである。従って一応、分類の基準の参考にはして見たが、相違がある。その特徴を示すと、語彙表の方は、原因でことばを考えているのか結果でことばをとるのか不明な点がある。たとえば「気がね」という語に關していえば、「気がね」というのは、分類語彙表で、体にはいっているが、「気がね」の意味内容から考えれば、気に関する躊躇の状態の指摘と、いいだろう。それから考えると相になる。意味内容でなく、その状態をひとつの対象化したものとして結果で考えるとき、当然、それは語彙表の分類通り体となる。しかしこのように解釈すると、「気まま」という語は反対に相に入れている。これは分類語彙表の結果を先にするか、原因を先にするか少し基準にずれを感じさせるところである。従って我々の分類は両方の解釈が成り立つものは、

一方を捨てることをしないで、体と相、両方にいれた。

○分類基準と用例

体は気を対象化してとらえようとして
いるもの。用は、気を働きとしてとら
えるもの。相は気を姿でとらえよう
としているもの。と三つに分けて考
えてみた。そして各々を、さらに細分類
してみた。

体①名辞的用法：気を対象化する
もの

(「気がね」)

②評価的用法—人の評価基準と
なっているもの、気の質をい
うことのためであろう。

(「気よわ」「気がよわい」)
注(「気よわ」が名辞的用法で

あることは、いうまでもない。
従って名辞的用法のある語は
評価的用法を含むといえる)
用①使途—気そのものの意識的作用化
(「気遣い」)

注(この語などが既述の如く、
分類語彙表では「体」に入れら
れている。名辞的用法とも認
められるからである。しかし、
われわれの目的からでは、こ
れを、もし、体に入れ用から除
くとすれば、気の発達を見る
ということから遠ざかってし
まうので、このような扱いを

するのである。)

②処置—気分の転換

(「気ばらし」)

③作用・働き—気の働きを把える。

(「気がきく」)

相①所有の在り方—気のもちようを
あらわす。

(「気を失う」)

②自覚の在り方—気の動いている
状態の自意識化を、言い表わそ
うとする。

(「気がとがめる」)

③状態の指摘—気色を表わす。外
からみて気の状態を指摘する。
(「気ぜわしい」)

以上のように分類した結果が表1であ
る。(類似語は語数だけ欄外に記載し
た。)表1の分類結果を種類別語数と
して示したものが表2である。全部で
三二六語、但、類似語があるので、そ
れは()の中に書き、グラフでは点線で
示すことにした。

表2でわかるように気の状態を把え
ようとしている相が全体の半分を占め、
語数は類似語も含めて(カッコの中は
類似語の数である)一五八(七一)用
は一三三語(三八)、体は五五(一一)
で、用は全体の $\frac{2}{3}$ 、体は $\frac{1}{3}$ である。全
体的傾向から考えると、気は相↓用↓
体の順に習得されていくように思う。
気をようすで把えるのが人間にとって、

表2-B (全体を、100%と、みたととき、それぞれの分類語数の割合を棒グラフで示す。)

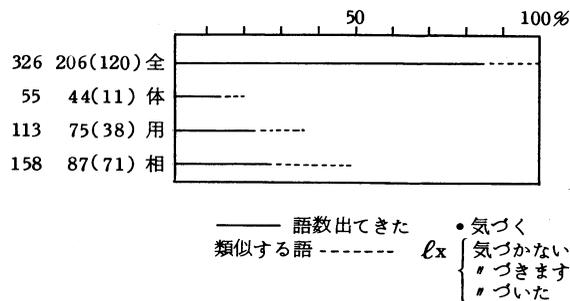
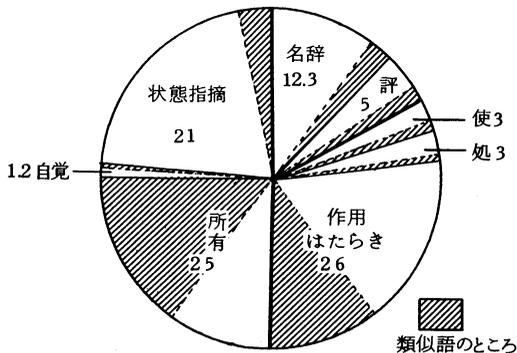
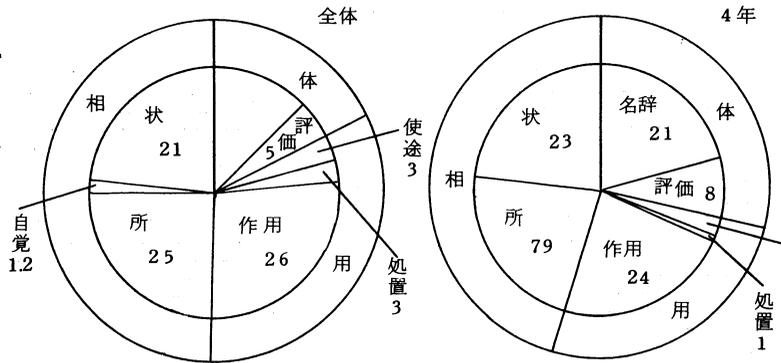
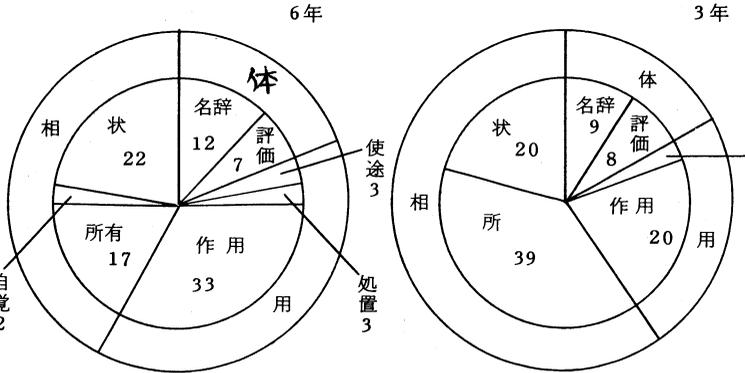
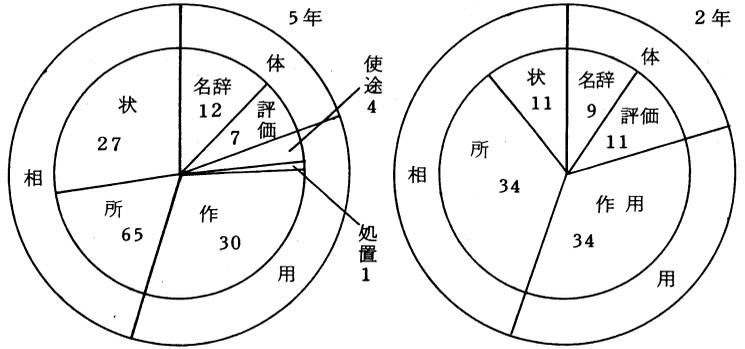


表2-A (語数の)分類別、全体のグラフ



一番たやすく、そしてそれを対象化す
なわち、客観的に把えることが一番困
難であるように思う。それは、気その
もの持っている特質からいえるので
はないだろうか。「気は機なり」とい
う古人の言もある。相手に対処する対
し方が気であり、外的事象に反応する
時、気は発動するの謂なのであろう。
だからその反応状態を指摘する相が一
番多いのも、もっともだと考えられる。
しかし、中の内容を細かくわけて考
えてみると、全体の円グラフ(表2A)
から、類似語を捨てた時の語数順位は、
次のようになる。状態の指摘(相)↓
作用・働き(用)↓所有の在り方(相)
↓名辞的用法(体)↓評価基準(体)
↓使途(用)↓処置(用)↓自覚の在
り方(相)必ずしも、相の部類にはい
ったものが、%が高いとは考えられな
いのである。評価基準の所までは、今
までいっていた考え方で、考えつくが、
その後、使途、処置、自覚が問題である。
使途は三年から出はじめ、処置は四年
から出はじめ、自覚は六年になって、
はじめて出てくるコトバである。とい
うことは、使途で、気を使うという意
識が出来はじめ、処置は気をつかうこ
とにより、次の段階の気の転換を意識
して行う、ということなのか。気の自
覚は、感情的な停滞を意味するので、
その次の段階を意味するのではないだ

表3 各学年別に分類した円グラフ



ろうか。これを、さらに考えるに当り、各学年ごと、分類別の円グラフを作成した。これが表3である。このグラフと、各学年の特徴用語を追い、学年別の段階を考えていこうと思う。

○ 学年別・気と意識とのかかわり合い方

表1より、各学年別の高い語を並べ

てみると、次の様になる。

二年 4語
 気をつける 75%
 気になる 68%
 気がいい 41%
 気がくるう 31%

三年 3語
 気がつく 62%

気になる 51%
 気がある 35%
 四年 3語
 気がつく 62%
 気になる 51%
 気にする 34%

五年 5語
 気をつける 80%

気がつく 53%
 気にする 36%
 気がある 33%
 気になる 31%
 六年 3語
 気にする 60%
 気になる 51%
 気がつく 30%

これから次のような特徴があるといえる。気がいい・気がくるう(二年生) ↓ 気がある(三年生) ↓ 気がある(五年生)と、次々、その学年特有の特徴がみられる。ここでは、二・三・五年が30%以上の比率で、特色が出てきたが、学年別・分類円グラフ(表3)等を参考に、各学年の特色を見ていきたいと思う。

◇ 二年生の特徴

二年生に特に多い語は、「気がいい」「気がくるう」である。これは「気がくるう」「気がいい」ということを意識しているのではなく、その子自身がその状態におかれているときの言葉である。つまり、全く気そのものを意識化することがないというのが、特色であるように思う。円グラフ(表3)を見ると、分類別にわかれていても、その項目には、気の意識づけがとりわけて行なわれている語は少ない。ちなみに気を対象化していると考えられる体の所を参照してみると、「気がつよい

6・気がよわい8」と、他学年より高い多が出ています。がしかし、「気がいい」「気がくるう」の多の高さからすると、二年生の「気がつよい・よわい」というのは、高学年のそれと同じ意味を持つとは考えられない。自分自身が、自分自身の中に没頭して、得られた語のように考える。他の項目の語も、そのように考えて、よいのではないかと思う。

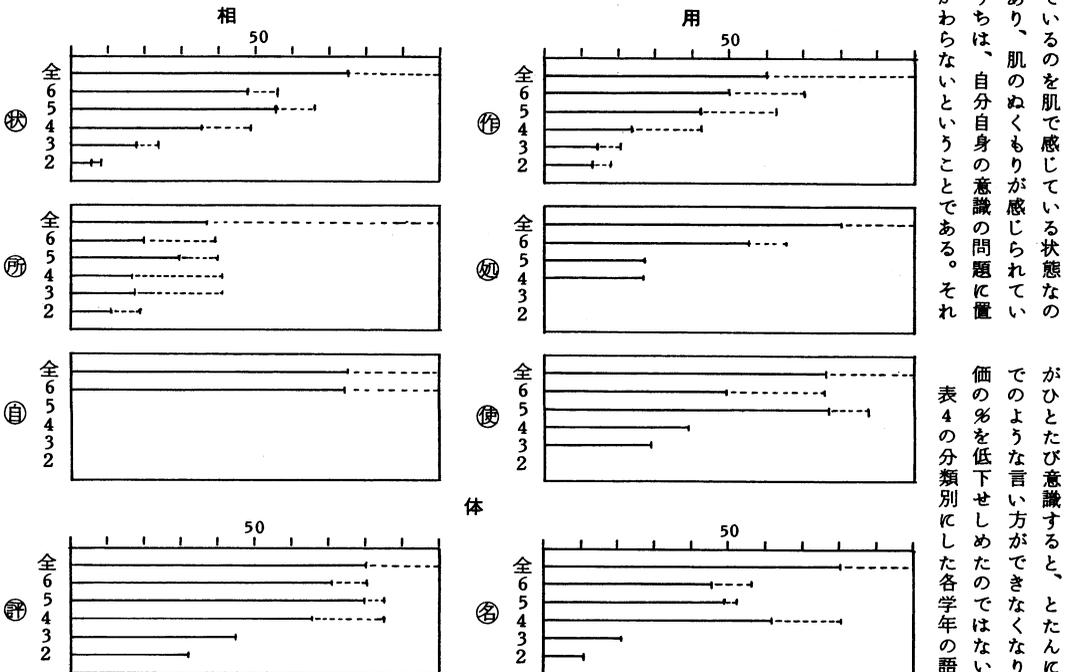
◇三年生の特徴

三年生の特徴は、二年と同じく気の使い方において、まだ意識的とはいえない。しかし二年では見られなかった他の方面に向って気のアンテナが動きつつあることが認められる。「気がちる」35多とか、「気にさわる」20多等の語が示され、気の不安状態を獲得してきている。おちつかず、絶えずアンテナが動く。これは二年生の全く自分自身の中に没頭している状態からの脱却ということが、考えられる。円グラフ(表3)の方を見ると、三年から使途が出はじめてきて、その多は、三年(1)・四年(2)・五年(4)・六年(3)と多少、全体で占める割合は増してくる。先に使途のところ述べてしたが、五年生が、その頂点にあるが、「気がつかう」に關しては三年生は(「気がまわる」3多「気がつかう」21多)と二語にもかかわらず、最高を示している。

◇四年生の特徴

四年生は特別の多の語は見あたらなかったが、表3の円グラフの特徴を見ると、他の学年は体の名辞と評価が相変わらず全体的に少なく、多も同じ位を示しているにもかかわらず、四年生の所で、その割合が広がる。他の項でも、述べるが、四年だけの語を拾っても他の項目に比べ、四年生は名辞的な用法の語が多い。ということは、四年生で、ひとつの転機を迎えるとしてよいのではないか。今まで、気を無意識に感じていた時点から、意識化できにくる。ということである。物事を対象化して考えることが出来るようになる。ただひとつ並行して考えていくと、評価の語の多が四年生は、「気軽」を除いては全部最低の多である。(「気がつよい」5・「気がよわい」3・「気がながい」3・「気がみじかい」3)ということ、四年の評価の内容に二年三年から変化があるというのは憶測にすぎないだろうか。つまり評価する事自体、相手に意識が向くようになってきた。相手を意識してものを言っているとしては、おかしいだろうか。二・三年のそれは、単に気の強さ弱さの中に自分の身を置いてしまっているの気であり、その中から、気を対象化して見とっているとは考えられない。つまり他人に対する評価ではなく、自分自身の気が強くなったり、弱くなったり

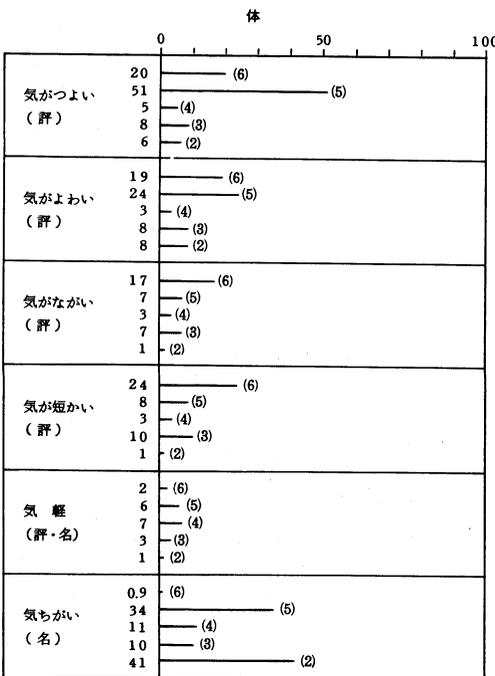
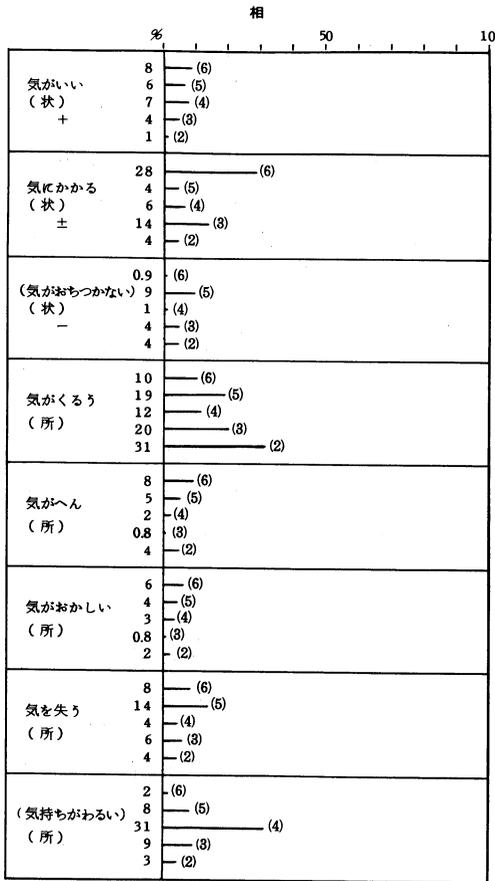
表4 分類別、棒グラフ



しているのを肌で感じている状態なのであり、肌のぬくもりが感じられているうちは、自分自身の意識の問題に置きかわらないということである。それが

がひとたび意識すると、とたんに今までのような言い方ができなくなり、評価の多を低下せしめたのではないか。表4の分類別にした各学年の語数の

分類別、学年の傾向比較



学年である。六年になると感情を流すことを覚え、感情処理がある程度出来ている。つまりいわゆる心情的となり、一般的状況把握が妥当して来る。

△名の高い語についてV

気に関する語は、言うの複合語と比べて、これだけは必ずこの学年だけ出るといふ特徴的なものはなく、全体(二年～六年)で出ているものは、特に順位とか、発達とかを感じさせぬような気ままな出方をしている。二年～六年まで、全学年が名を示している。グラフは、表5に示す。しかし、この気ままな出方が、また本来人間と気のかかわりだと考えねばならない。従

表 5

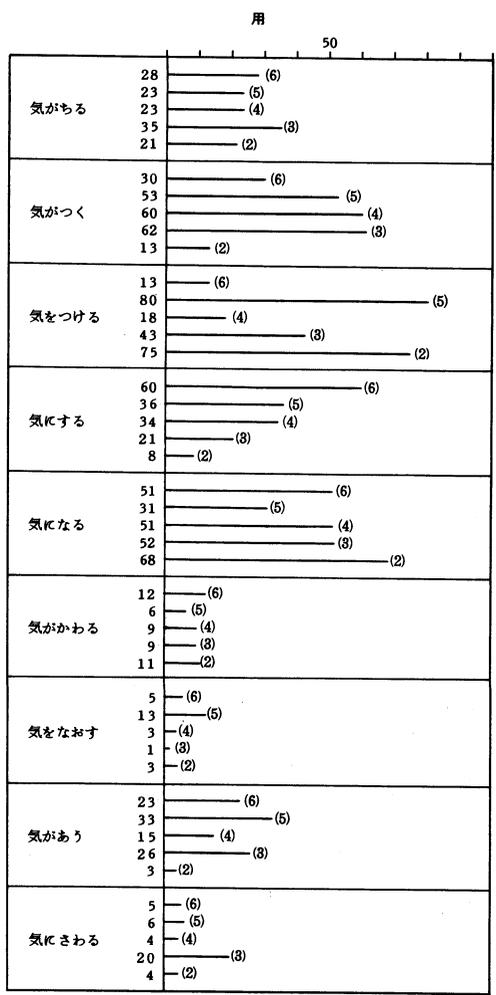
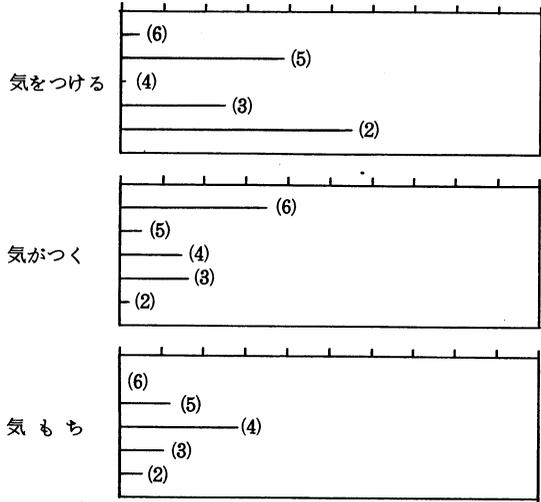


表6 多いと思われる語のグラフ(初出語)



一覧表

年	第一位	全部で18語
6年	気がつく(34%)	23語
5年	気をつける(37.5%)	26語
4年	気もち(28%)	24語
3年	気をつける(24%)	16語
2年	気をつける(55%)	

(付録)教科書における気の

用語の採択とその問題点

1. 語数について

学年別・出版社別語数をあげると次の通りになった。()の中はその使用回数を示している。これを見ると同じ語が何度も使われているということになる。また、それだけに、気に関する

語彙の少さも今後の問題点であろう。ちなみに児童から出た語は類似語を含まずに二〇六語、教科書にある語は六三語である。これでは気の発達は教科書で学ぶ以前に、児童の自然発達が先行しているといわねばならない。

語数(学年別, 社別 語数)()の中は使用回数

	光村	教出	日書	東書	学図	全
1	1(5)	2(3)	0(0)	3(10)	2(7)	
2	3(16)	4(15)	5(15)	3(8)	4(11)	
3	5(12)	7(15)	2(21)	5(21)	6(23)	
4	8(34)	9(50)	9(42)	8(29)	10(36)	
5	15(66)	15(62)	9(47)	12(55)	17(49)	
6	18(46)	19(53)	18(45)	14(50)	16(65)	
	31(179)	32(198)	25(170)	24(173)	29(181)	63語

集中されているところを知りたいからであった。結果は表6を参照されたい。表6のグラフは先に示した表5(50%以上の語)の「気をつける」「気がつく」のグラフと、ほとんど%が変わらない。ということは、まず初めに思い浮ぶ気というのは、気の作用(働き)が直観されていることである。この論文のはじめには気を姿としてとらえる相が一番多いと書いていながら、矛盾するようではあるが、姿としてとらえようとしている相はその種類としての数が多いが%は低く散っている。結局頻度数50%以上の語は四語とも作用に属する語である。これらの四語から考えてみても、初出語の語句に子どもたちの気に対するなまの感覚が出ている

ように思う。言葉で教えられる以前に子どもたちが、どこかでかぎつけている直観が、はからずもここに出たということなのだろう。特に「気をつける」と「気がつく」は気の意識化と発動性の二面をいう語である。気は意識よりも先に動く。そして意識化することにより、また次の発動への手がかりとなっていく。50%以上の語について述べたことが、初出語において更に裏付けできたように思う。それぞれの学年の初出語の数をみると、二年16語・三年24語・四年26語・五年23語・六年18語という結果で、気をまず、思い浮べる範囲はどの学年も大同小異ということを示しているものと思える。

2. 体・用・相別の採択語数について

児童調査の結果その採択語数のひらがりは相↓用↓体の順である。各社教科書のうち、これと同傾向にあるのは光村のみであるが、五社全部合わせると、おもしろいことには、その採択語

全相用	学相用	東相用	日相用	教相用	光相用
20	12	12	12	13	13
↓	↓	↓	↓	↓	↓
10	9	9	8	12	10
↓	↓	↓	↓	↓	↓
8	8	8	5	7	8

